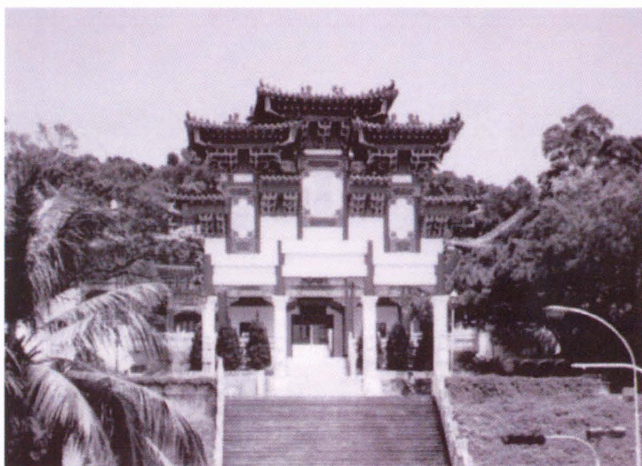




非文字資料をデータ化すること、また文字表現を媒介とする研究の場で検討するということ自体、作業として矛盾を含んでいます。その矛盾とどう向きあうのか、それは研究者の個々のイマジネーションや洞察力がひとつの支えとなるでしょう。そうしてそのような問題意識を基にした研究会でその道筋をより明確にしていきたいと思っています。そうである以上、各々の内にある時代や社会や地域に対する認識とその足場として明確に示しあ



花蓮県忠烈祠に改変された旧花蓮港神社（戦前は県社）

うところから始めなければなりません。ここで方法とは模索のスタイルの明示から離陸をし始めることになります。



海辺に家々が短冊状に並ぶ新潟県出雲崎

各班の目指すもの

第4班

文化情報発信の新しい技術の開発

佐野 賢治（神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科・教授）



第4班は、70年以上にわたる日本常民文化研究所の図像・民具・写真資料に関する調査研究の蓄積を踏まえた1班から3班による資料の体系化の作業と共同しながら非文字資料を文化情報として発信するシステム、および新しい技法に習熟した専門技術者養成方法の開発を目指します。このプロジェクトの主題は、非文字資料、文字に表現されない人間の諸活動を資料化し、それを体系化することですが、わが班では、文字資料の伝存形態もその視野に入れながら、人間の諸活動のあとに残されたすべてを資料と捉え、大きく資料のあり方から人間の営み、生活

を追及することが可能であることを第一の前提として考えています。

第二に、図像、身体技法・感性、環境と景観、それぞれの具体的資料の体系化を目標とする他の班と違い、第4班は、①対象→②資料化→③データ化→④体系化→⑤公開化と資料処理のすべての段階をソフト・ハードの両面から扱います。そのために班員は文書・民俗・民具資料の伝存形態や資料の制度的・社会史的な扱い、情報理論・工学に関心を持ち、アジアや欧米の資料館（博物館・文書館・美術館など）の事情に詳しいもので構成さ

れています。

第三に第4班には、①文化情報発信のためのシステム開発、②資料館に勤務する高度専門職業人（シニア・キュレーター）養成方法の開発という二つの大きな目標を実現するためのプロジェクトグループの性格が強く要請されています。この二つの目標の実現の可能性を博物館展示や建設を結節点にして提示できればと考えています。

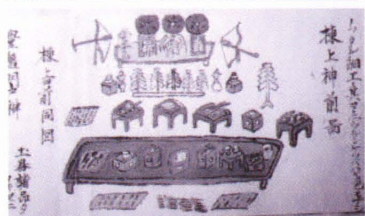
上記の点を踏まえて、具体的な作業として開始するのは①として、国内では、福島県只見町において民具・民俗・文書・景観資料を民具使用動作撮影・民具写真・実測図→民俗誌の裏付け→文書資料との整合→環境景観の変遷との比較（ダム建設以前以後）の作業を通し有機的に関連させ山村の生活構造モデルを時間軸で提示、地域性解明また地域振興のための情報発信の場としての博物館のあり方を提示、国外では、中国・雲南省麗江にある東巴文化博物館・東巴文化研究所との協力関係の下に納西族の東巴儀礼・東巴文字・東巴經典の関係性を、身体技法（東巴儀礼）—画像化（象形文字）—文字化（東巴經典）—口承化（神話・年中行事）の諸相から把らえ、身体技法の体系化の具体例として位置づけます。多様なさまざまな性格を持つ中国少数民族の儀礼伝承をはじめ、非文字資料の扱い方モデルの一例を納西族の例で提示できれば、人類文化研究のための非文字資料の体系化という目標に沿うことにもなります。また新たなユネスコの無形の世界遺産の考え方に対するモデル的作業としての志向も目指します。

さらに、考慮にあがっている活動として、写真資料のデータ化・体系化があります。日本常民文化研究所所蔵渋沢

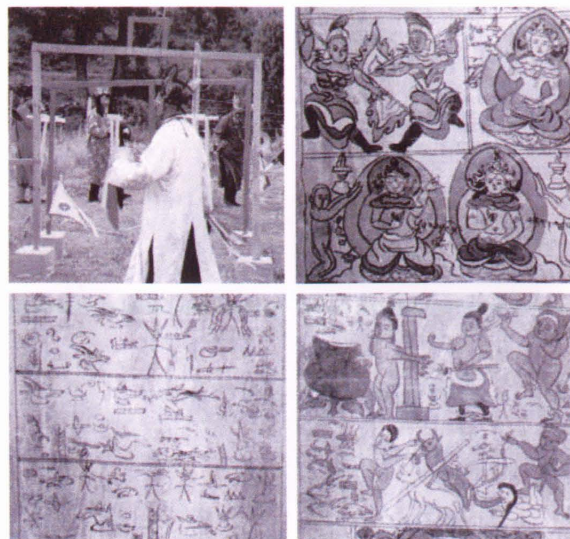
写真の修復・保存技術開発、写真資料の時間軸・分野別データ化、また日系海外移民はじめ海外の日本関係写真資料のデータ化および写真資料公開化のシステム開発です。

②のシニア・キュレーター養成プログラムの開発については、学芸員養成の現状と問題点の検討、欧米のキュレーター制度の比較検討、博物館と地域社会・学校教育の関係性などを論議しながらそのシステムの開発をソフト・ハードの両面から考えていきます。そのために、博物館キュレーター制度において長い伝統を擁する欧米の養成プログラム、また類似の文化環境を有するアジア各国の博物館のあり方、博物館制度および学芸員制度を調査検討します。

以上の作業を班員及びPD、RA及び現地の研究協力者との共同研究の下に進め、中間報告を研究会及び年次報告で発表しながら、その成果は、国際シンポジウム『もの・モノ・物の世界—人間の諸活動と非文字資料—』開催、日本常民文化研究所展示室において人間の諸活動の結果としての資料から人間の営みを総合的に捉える実験展示『ホモ・マテリアル—人と資料—』で公開できればと考えています。このプロジェクトのホーム・ページも文化情報発信の新技术として積極的に位置づけ、最新のIT技術を駆使したコミュニケーション展開の方法も試行していきます。学芸員・アーキビジニスト等高度専門職業人養成プログラムに関しては大学院博物館学講座を開設し、資料を総合的に扱い、企画力のあるシニア・キュレーター養成カリキュラムを編成するとともに、博物館学芸員の再教育のシステム開発にも力を注ぎます。



上棟式の実際と職人
巻物に描かれた図
（福島県只見町）



（左上と左下）現行の東巴儀礼と東巴文字（儀礼の象形化）
（右上と右下）葬式に使われる神路図（中国雲南省 納西族）